

平成26年度予算編成方針

総論

内閣府による平成25年9月の「月例経済報告」によれば、「景気は、緩やかに回復しつつある。」として、景気の基調判断を2か月ぶりに上方修正した。安倍政権の経済政策「アベノミクス」を受けて、企業収益の改善が設備投資や給与の増加につながり、消費も増えるという好循環の動きが着実に現れつつあり、景気が回復傾向にあるとしている。

そのような経済情勢の中、国においては、強い経済は国力の源泉であり、強い経済の再生なくして財政再建も日本の将来もないとの基本認識のもと、いわゆる「三本の矢」により、早期にデフレを脱却し強い経済を実現するとともに、基礎的財政収支の改善により財政健全化を進めていくという双方を柱とする「中期財政計画」を策定した。

また、平成26年度の概算要求に当たっては、「中期財政計画」に沿って、平成25年度予算に続き、民需主導の経済成長と財政健全化目標の双方の達成を目指し、メリハリのついた予算とするため、施策の優先順位を洗い直し、無駄を徹底して排除しつつ、予算の中身を大胆に重点化することを基本的な方針としている。

なお、政府は消費税率(国・地方)を平成26年4月1日から8%へ引き上げることと決定するとともに、新たな経済対策の実施により、経済再生と財政再建を同時に進めることとしている。

地方財政においては、総務省の概算要求において、「経済財政運営と改革の基本方針」及び「中期財政計画」を踏まえ、地方の安定的な財政運営に必要な地方の一般財源総額について、平成25年度地方財政計画の水準を下回らないよう実質的に同水準を確保するとしているが、地方交付税の算定については、地域経済活性化と行革努力に関する指標を新たに設けるなど、不確定要素が多く不透明な状態である。また、歳出面では、少子高齢化等の進展に伴う社会福祉関係経費の増加に加え、公共事業や地方財政対策などに伴い発行した公債費等の義務的経費が大きな負担となるなど、地方の財政運営は厳しさを増すことが予想され、財政健全化に向けた改革に取り組むことが重要である。

本市の財政状況は、これまでの行財政改革の取り組みにより、平成24年度決算では、昨年度に引き続き市債残高は減少し、財政調整基金は増加するなど、健全化に向けた一定の成果が現れている。また、財政健全化法による将来負担比率は、対前年度比12.7%下降し、91.6%と好転したものの、財政の硬直性を示す経常収支比率は、扶助費をはじめとした社会保障費等の増加により、対前年度比0.4%上昇し、89.8%となった。

また、今後の財政運営においては、景気回復の兆しが見えない中、市税や地方交付税の伸びは期待できず、高齢化の進行に伴う社会保障関係経費の増大が見込まれるなど、非常に厳しい状況になると予測される。

このような中、平成26年度の当初予算編成にあたっては、行財政の効率化と基

盤強化を追求し、歳入に見合う財政構造への転換に向け、徹底的な財政の健全化に努め、創意と工夫をもってあらゆる方策を探り、最少の経費で最大の効果を挙げられるよう、次の基本方針により取り組むものとする。

基本方針

平成26年度予算の総務省の地方交付税の概算要求額は、出口ベースで前年度比△3千9億円（△1.8%）の1兆6千6百15億円となっている。さらに、今後の財政運営を睨んで、財源調整機能のある財政調整基金及び減債基金の取崩しを極力抑制した場合、多額の財源不足となり、厳しい予算編成になることが予想される。

よって平成26年度の予算編成にあたっては、市民と行政の協働によるまちづくりを展開するため、厳しい財政状況を職員一人ひとりが十分認識し、全庁を挙げて所要財源の積極的な確保を図るとともに、限られた財源の中で、市民ニーズに即した選択と集中による効果的・効率的な事業を推進し、協働により「九州一安心安全なまち小林市」を目指すものとする。

なお、年度当初に市長選挙が行われるため、当初予算は市政運営の基本となる経費を中心とした、いわゆる骨格予算とするが、予算要求については年間を通じた見積もりを行うこととし、当初予算に計上する経費については、予算編成過程で調整する。

1. 通年予算の編成

当初予算は年間を通じて予測される全ての財源と、年度内に必要とされる全ての事業費を要求すること。原則として、制度改正に伴うもの、災害復旧に係るもの及びその他緊急を要するもの以外は、年度途中における予算の補正は行わない。ただし、平成26年度当初予算は、骨格予算であり市長選挙後の6月補正を肉付け予算とする。

2. 枠配分方式による予算編成

平成26年度の予算においては、昨年に引き続き、全ての部局等の一般会計を対象として枠配分方式による予算編成を実施する。

枠配分方式とは、各部局が主体的に事業の方向性を判断し、コスト意識の向上と質の高いサービスの提供による効率的な行政運営を行うため、配分された一定の予算枠に収まるよう、事業の取捨選択を行った上で、枠配分された一般財源と事務事業に係る特定財源をもとに予算を編成するものである。

枠配分額は、原則として平成25年度予算（9月補正後）における一般財源の額に消費税率の引き上げ等に伴う影響額を見込んだ額の98%とする。ただし、義務的経費、重点施策事業（本年度の施策評価二次評価において事業費を伴う拡大として指示された事業）、起債を財源とする事業、基金を財源とする事業等、査定対象経費は枠配分の対象外とする。枠配分の対象外事業及び特別会計は、従来同様の査定方式による予算編成を行う。

3. 小林市総合計画（後期基本計画）実施計画及び市長マニフェスト推進計画に沿った予算編成

総合計画に掲げる「人々の知恵と融和で築くまちづくり」の基本理念のもと、合併後の新しいまちづくりを計画的に進めていくため、「小林市総合計画（後期基本計画）実施計画」及び「市長マニフェスト推進計画」に沿って、限られた財源の中で最大の行政効果を得なければならない。

4. 行政評価の反映

行政評価（施策評価）の結果に基づき予算計上すること。

5. 行財政改革の推進

新行政改革大綱及び実施プランに則った改革を確実に実行し、市民と行政の協働のまちづくりを推進するとともに、健全で効率的・効果的な行財政運営を推進し、財政の健全化を図るものとする。

また、有料広告等の掲載による、自主財源の確保と経費削減に積極的に取り組むこと。

6. にしもろ定住自立圏共生ビジョンに係る事業

「にしもろ定住自立圏共生ビジョン」に掲載する事業（えびの市、高原町と確認が取れている事業）のうち、予算を伴う事業については、漏れが無いように予算計上すること。

また、定住自立圏共生ビジョンに係る事業のうち新規事業となるものについては、新規事業事前評価の対象とはせず、各市町首長で構成する協議会での事業承認をもって、事前評価で承認されたものとして扱うこととする。

7. 平成26年度重点事業(政策的経費)

平成26年度重点事業として位置付ける主な事業は、以下のとおりであり、積極的に予算計上すること。

- (1) 地域資源（チョウザメ等）を活用した6次産業化の推進や安心・安全な農産物の販路拡大に向けた取り組み等により地域産業の活性化に資する事業
- (2) 小林地区においては、中心市街地の活性化に向けた取り組み、都市再生整備計画（小林駅周辺地区）及び商業高校跡地利活用計画に基づく事業
- (3) 須木地区においては、もみじの里づくり事業など地域資源を生かし、地域の活性化に資する事業
- (4) 野尻地区においては、観光施設（のじりこぴあ等）や大塚原エリアの施設整備など地域の活性化に資する事業

なお、コスモス牧場については、今後の運営方法等を十分協議の上、必要な予算を計上すること。

8. 新規事業に対する財源確保

新規事業については、目的、費用対効果、後年度負担などを十分検討したうえで、既存事業の見直しにより、その財源を生み出すことを基本とする。

なお、要求にあたっては、新規事業事前評価（二次評価会議）の結果、承認された事業であることを原則とする。

9. 投資的経費

投資的経費については、厳しい財政状況の中で、事業の必要性、緊急性、投資効果等を考慮し、市民の行政需要の優先度を判断した上で配分を行うこととする。また、計画にあたっては、維持管理経費等の後年度負担にも配慮すること。

10. 合併による効果

新市の一体性や均衡ある発展に資する事業については、財政支援措置を有効に活用するとともに、合併による効率性を追求し、歳出の削減効果を最大限に反映させなければならない。

11. 合併調整済の経費

平成26年度は、旧野尻町との合併から実質的に5年目であり、合併協定項目、事務事業の一元化による調整方針等の協議に沿った要求を行うこと。

12. 未利用財産について

現在、総務省の指導のもとバランスシートを整備しているところであり、その中で財産の把握と台帳の整備を行っている。これは、資産・債務改革として遊休資産の把握と、その売却・活用について検討することを求めたものであり、未利用財産についてはその整理について早急に検討すること。

13. 消費税率引上げへの対応

平成26年4月1日より消費税率（国・地方）が5%から8%に引き上げとなるので、歳入歳出両面にわたり、遺漏のないよう対応すること。

歳入に関する事項

歳入の見積りにあたっては、社会経済情勢の動向、過去の実績等を精査分析し、地方財政に関する国・県の制度改正の動向等の情報収集に努めること。また、正確にその財源を捕捉し、過大、過小にならないよう留意すること。

1. 市税

歳入に占める市税の重要性を認識し、個人所得の状況、企業実績、制度改正等の動向を勘案し、的確な収入見込み額を計上すること。また、税負担の公平を期すため課税客体の捕捉漏れを防ぐとともに、滞納整理の早期着手、計画的な取り組みなど収納率の向上に最大限の努力を払うこと。

2. 使用料及び手数料

住民負担の公平性及び受益者負担の原則にたち、物価の変動や人件費を含む必要経費の状況等を十分に検討のうえ見直しを行い、年間収入見込み額を計上する

こと。また、各施設利用における減免規定の適用についても、妥当性等を考慮し、見直しに向けた検討を行うものとする。

3. 国・県支出金

国・県支出金については、国・県の動向を十分に見極めながら、積極的な確保に努めること。ただし、補助事業ということで安易に対応することなく、必要性・事業効果等について十分に検討すること。

4. 分担金及び負担金

事業の性格、規模等から適正な負担を求め、法令・条例等に基づき、また他自治体の状況等を十分に検討した上で、確実な収入見込み額を要求すること。

5. 市債

地方交付税算入措置のある有利な地方債の活用を原則とし、市債残高の縮減と公債費負担の適正化を図るため、当該年度償還元金以内の市債発行とし、合併特例債及び過疎債についても、その有効な活用方法について検討する。

歳出に関する事項

歳入の増が見込めない状況を深く認識し、歳出予算の計上に当っては、スクラップが可能なものはスクラップすることを基本とする。

その上で、既存事務事業の統合や縮小を検討し、真に必要なものだけを要求すること。

1. 扶助費

類似団体と比較すると、本市の扶助費の決算額及び経常収支比率に占める割合は、平均値を大きく上回っており、市の財政を圧迫する原因となっている。従って、法令で義務付けられているもの以外については、市が担うべきサービスの範囲や水準が適正なものであるか検証を行い、必要な見直しを行うこと。

また、国の制度改正の動向に十分留意するとともに、決算や支出状況を踏まえ、適正な見直しを行うこと。

2. 負担金

会費的な負担金は、加入している協議会等の効果について再度見直しを行い、類似団体への加入や行政効果の低下したものについては、加入を取りやめること。

3. 物件費

事務事業の抜本の見直し及び創意工夫を行うことで、効率的な運用を心がけ、全般的な節約に努めるものとする。

特に委託料については、委託内容や回数等について検討を行い、職員で対応可能かどうかの見直しを行うこと。

4. 市単独事業費

事業の必要性、緊急性、補助事業費との関連等について十分検討し、真に市民生活の質の向上と地域の活性化に資するものを優先する。

5. 補助事業費

国・県の予算編成の動向に留意するとともに、投資効果を十分考慮の上で、長期的観点から効果的に投資が行われるよう綿密な事業計画を立てて要求するものとする。また、負担額及び補助率が明確でないものについては、特に慎重な対応を行うこととする。

6. 補助金等

市の厳しい財政状況を踏まえ、補助金については目的、効果等について可能な限り客観的な分析を加え、徹底した整理合理化を行うものとし、新規補助金については、原則として終期を設定し、その財源については、既存の補助金の廃止又は縮減により対応することとする。

また、国・県支出金等の財源のある補助金についても、同様の取り扱いとする。

7. 貸付金

貸付の目的、効果、資金需要等を考慮し、その対象、方法及び条件について検討を加え、真にやむを得ないものに限定するとともに、貸付規模については、過去の実績にこだわることなく最小限にとどめるものとする。

特に、無利子及び低利なものについては、大変厳しい財政事情であることから、状況を精査した上で金利設定の見直しに向けた検討を行うものとする。

8. 細々目の取り扱い

予算要求における、細々目（共通、小林、須木、野尻）の基本的な取り扱いは、小林、須木、野尻に共通する事業については、一体性の確保と、事務効率化の観点から「共通」を使用し、さらに、予算執行時に「執行委任制度」により執行すべきものについては、執行委任制度によることとするが、共通する事業であっても、別々に計上することが容易かつ合理的である場合には、「小林」「須木」「野尻」として要求できるものとする。

9. 特別会計及び公営企業会計等に関する事項

特別会計についても、要求は一般会計に準じることとし、使用料・保険料などの市民負担の適正化を念頭に財源の確保を図るとともに、将来にわたる的確な収支見通しに基づく経費の節減・合理化に努め、一般会計からの繰入金を圧縮するよう最大限の努力を払うこと。